

---

(令和5年12月20日掲載)

# 「分からない」を受け入れる



---

## 村山 綾 (むらやま・あや)

近畿大准教授。1979年高知市出身。土佐高を経て米国の州立モンタナ大学心理学部を卒業後、大阪大学大学院人間科学研究科で博士前・後期課程修了。博士(人間科学)。日本学術振興会特別研究員を経て現職。専門は社会心理学。集団や社会で生じるコミュニケーションの齟齬について研究する。著書に『「心のクセ」に気づくには—社会心理学から考える』(筑摩書房)がある。

---

「そんな時間にそんな場所にいたからでは?」「服装のせいでは?」「逃げられたのでは?」  
事件や事故のニュースを耳にし、詳しいいきさつを知らないにもかかわらず、このようなことを心の中で思ったり、不特定多数の人たちが閲覧できるインターネットのサイト上で発信したり、身近な人に直接伝えたりした経験はありませんか。実は、被害者を責めるような反応や発言をとっさにしてしまうことには、私たちが社会に対して知らず知らずのうちに抱えている期待や理想が影響しています。

私たち人間は、予想外の出来事に遭遇したり、先の見通しが立たない状態で過ごし続けたりすることがとても苦手です。できる限り安定して、秩序だっていて、人はその人にふさわしいものを手にしているような、次に何が起こるか予測可能な社会で暮らしたいと望みます。

勉強を頑張ればテストで良い点数を取れるし、健康に気をつけていたら病気なんかしないし、隠れて悪いことをしていても後から必ず見つかって罰を受ける。そんな社会が理想です。映画やドラマ、時代劇、子ども向けのアニメや絵本にも、良いことをしたら良い結果が、悪いことをしたら悪い結果がもたらされるという描写はたくさん登場します。

この秩序を信じて暮らすことは、心の安定につながります。将来の目標に向けてコツコツ努力をしたり、自分は幸せだと感じたりすることを助けてくれます。その一方で、自分の信じる秩序が乱されるような出来事を目の当たりにすると、強い不安が生まれます。

事件や事故の被害者のニュースは、まさに、この不安を生み出すきっかけとなるのです。正しく生きていれば、ひどい目にはあわないはずだ。だから、そんなひどい目にあった人には、なにか落ち度があったに違いない。正しく生きている私にはそのような不運は

---

起こらない—。この思いが、冒頭で示した言葉を生み出します。そうやって、なんとか自分の不安を打ち消そうとするのです。

被害者を責めれば、自分の不安はいくぶん解消されます。しかし、事情をよく知らない第三者から一方的に非難される被害者の方はどうでしょうか。また、不運にも自分が事件や事故の被害者になった時に、「自己責任だ」と言われ、誰も手を差しのべてくれない社会は皆が生きやすい場所でしょうか。

他人に起こった不運な出来事の原因を知りたい気持ちは誰にでもあります。原因が分かればなんだかスッキリします。その不運な出来事を自分だったら避けられる気にもなりません。しかし、何が原因かは分からない、という曖昧な状態を受け入れる力も、最近は特に必要になっているように感じます。

「この人は助けるに値するか？ 同情に値するか？」そんなことは事情をよく知らない第三者には判断しようがないですし、判断する立場にもありません。

原因が分からずとも、事件や事故の被害者には同情や共感を示す。助けを求めている人がいたら手を差しのべる。そして、もし誰かに助けてもらったならば、次は自分が誰かを助ける側に回る。この考えが広く共有されていることが当たり前の社会を目指していきたいと思います。